注意！
■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農薬使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意下さい。

農作物技術情報　第７号　野　菜

発行日　平成２３年　９月２９日
発　行　岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編　集　中央農業改良普及センター　県域普及グループ　（電話　0197-68-4436）

「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「http://i-agri.net」 携帯電話からは「http://i-agri.net/agri/i/」

携帯電話用 QR コード

◆露地きゅうり　重要病害に対する防除の徹底
◆雨よけトマト　保温の徹底と裂果の発生防止
◆ほうれんそう　適切な温度管理と病害虫防除の徹底
　　適期は種と適切な温度管理による品質向上（寒締めほうれんそう）

１　生育概況

（１）台風 15 号による大雨や強風の影響で、草勢の低下など全般に生育は抑制されています。また、気温の低下に伴い露地栽培での出荷量が減少傾向にあります。

（２）露地きゅうりは、成り疲れや病害蔓延により出荷量は減少傾向です。特に、褐斑病や炭そ病の発生が多く、すでに枯れ上がった圃場も目立ってきています。

（３）雨よけトマトは、気温低下とともに裂果の発生が増加しており、出荷量は減少傾向です。全般に灰色かび病による被害がみられています。

（４）ハウスピーマンは、気温低下に伴い果実肥大が遅れ、果実品質の低下もみられています。露地ピーマンでは、草勢の低下とともに赤果の発生が目立つほか、台風後の擦れ傷等から腐敗果の発生が増えています。タバコガ類による被害は、全般に減少傾向です。

（５）雨よけほうれんそうは、一部に曇天や雨水流入の影響がありますが、概ね順調な生育です。ホウレンソウケナガコナダニ、アブラムシ類、シロオビノメイガの発生が見られます。

（６）ねぎは、収穫が継続して行われていますが、葉枯病、黒斑病などの病害や風雨による倒伏・折損が見られます。

（７）県北高冷地でのキャベツ・レタスは、収穫終盤となりました。連続した降雨や日照不足の影響で生育はやや緩慢になっています。キャベツではべと病の発生が例年より多く、レタスでは腐敗病、べと病、斑点病などが見られます。

２　技術対策

（１）露地きゅうり

今後は、気温も低下してくることから強い摘心は控え、アーチから飛び出した弱い芯を指先で摘む程度に止めます。摘葉は病葉・古葉・黄化葉等を中心に行い、草勢維持を図りましょう。

本年度、株が急に萎れる症状が見られた圃場では、片づける前に根を引き抜いて表面にホモプシス根腐病による黒変症状がないか確認しましょう。疑わしい症状が見られた場合や、次年度の作付けに不安がある場合は最寄りの指導機関に連絡し、残さ検診を受けることをお勧めします。

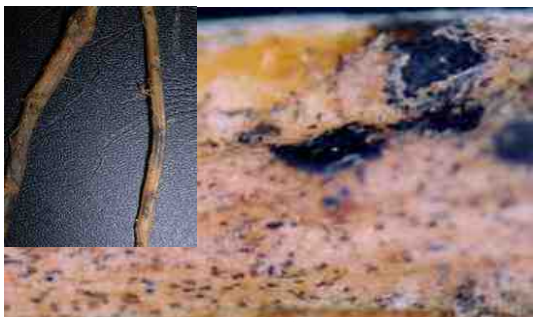

写真１　ホモプシス根腐病による根の状態
（左上：黒変症状　右：200 倍に拡大）

（２）雨よけトマト

極端に気温が低下した影響で、裂果の発生が増加しています。

今後、さらに発生しやすい環境が続くことから、夜間の保温に留意してください。この際、ハウスの密閉により湿度が高くなり、葉かび病や灰色かび病がしやすくなるので、防除の徹底に努めてください。

写真２　全摘葉処理を行うことで、裂果の発生を防ぎ収穫可能な果実が増加する。時期は９月下旬～10 月初めまでとする

また、裂果の発生軽減技術として全摘葉処理が有効です。全摘葉処理の方法は、9 月末から 10 月初めまでの間に写真のように葉を全て摘んだ後、霜が降りる前につる下げし、不織布をべたがけします。低温や霜の影響が回避され、収穫可能な果実が増加するとともに、裂果の発生を減らすことができます。

（３）ピーマン

雨よけ栽培では、夜間の保温により生育温度の確保に努めましょう。

全体的に赤果やひび割れ果の発生が増えています。特に下り枝に着果している果実は早めに除去し、草勢維持と早期収穫に努めて下さい。また、露地栽培を中心に斑点病の発生と消費地での腐敗クレームが増加傾向ですので、降雨前後にはカスミンボルドー等の散布により発生低減を図りましょう。

（４）雨よけほうれんそう

年内収穫のためのは種をもう１作検討しましょう。１か月、３か月予報では気温は高めと予想され、低温伸長性のよい品種を選択し、ハウスの開け閉めなどによる温度管理を適切に行い、年内に確実に収穫できるようにしましょう。

ハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生も多くなります。べと病抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して、病害が発生しにくい条件にするとともに、殺菌剤の予防散布も行ってください。

ホウレンソウケナガコナダニによる被害が多くなる時期です。近年は夏期にも被害が見られるほ場もあり、発生が周

写真３　シロオビノメイガによる食害（矢印の部分に幼虫がいます）

年化しています。今年被害があった圃場では、早期に殺虫剤の散布を行いましょう。農薬散布は薬液が心葉まで届くように丁寧に行いましょう。また、今年もシロオビノメイガの食害が広く見られます。幼虫は最初、心葉の隙間に入り込んでいるため見つかりにくいので、注意して観察し、防除が遅れないようにしましょう。

作付け終了後は、来年の施肥管理の適正化のために、土壌診断を受けましょう。

（５）露地葉茎根菜類

ア　ねぎ

最終土寄せから収穫までの日数が長くなりすぎると、品質の低下につながりますので、気象情報を参考にして計画的な作業に努めましょう。

病害の発生が多い傾向ですが、農薬散布は収穫前日数に注意して適正に行いましょう。

イ　キャベツ・レタス

県北高冷地の収穫は終盤です。作付け終了後のマルチ、残渣の処理を適切に行いましょう。病害により収穫できなかったものは早めに処理して、被害が蔓延しないように注意しましょう。

来年に向けて土壌診断の実施や堆肥施用による土づくりに努めましょう。

（６）冬春野菜

ア　寒締めほうれんそう

パイプハウスを利用する場合のは種期の限界は、地域や気象経過、品種、保温方法によっても異なりますが、10 月中旬頃が目安です。

保温のし過ぎで生育が進むと、十分な低温に遭遇する前に収穫サイズに達してしまう一方、温度が低すぎると収穫サイズに達しないまま冬を越してしまいます。本県の寒締めほうれんそうの出荷期間は 12 月～翌 2 月が基本ですので、ほうれんそうの生育状況に応じて、適切な温度管理を行いましょう。詳しくは平成 17 年度試験研究成果「寒締めほうれんそうの作期判定と生育調節技術」を参照して下さい。

冬期間は、大雪の影響でパイプハウスが倒壊する場合もあります。寒締めほうれんそうを作付けするハウスは１棟おきにして、作付けしないハウスはビニールを外す等、除雪しやすいようにしましょう。

イ　伏せ込み促成アスパラガス

気温の低下とともに、地下部への養分転流が進む時期です。地上部が自然に黄化して枯れ上がるようにするため、台風による倒伏などで、茎葉が傷むことがないようにしましょう。

本年度も気温は高めに経過する見込みです。根株の無理な早掘りは収量の低下につながりますので、5℃以下の遭遇時間を参考にするなど、適切な時期の掘り上げを心がけましょう（平成 18 年度試験研究成果「アスパラガス年内どり作型における 1 年養成根株の掘り取り時期」参照）。